

『定本竹山広全歌集』 大口玲子

二〇一一年三月、東日本大震災発生時に仙台にいた私は、当時の手帳を見ると、震災後の四月三日から一ヶ月間長崎に滞在している。原発からなるべく遠くへという焦りとともにあの頃の私の胸を大きく占めていたのは、一年前に亡くなつた竹山広さんの存在だった。竹山さんが九十歳でこの世を去られたのは二〇一〇年三月三十日、震災からちょうど一年前である。竹山さんが生きていたら、東日本大震災や原発事故のニュースに何を思い、どう歌つただろうか。震災から三年がたつた今年、今も仮設住宅に住む人がいる一方で原発の再稼働が話題となり、土砂災害や火山の噴火など、自然の力を思い知らされることも多かつた。震災によつて生じた問題が解決をみないまま、さらに分断や混迷が深まってゆく中で、今年八月、既刊の歌集すべてが収められた『定本竹山広全歌集』が刊行された。

・炎去りゆきし瓦礫を人掘れりいのち得てすることのはじめに
竹山広『千日千夜』

二〇〇一年に刊行された『竹山広全歌集』の序で三枝昂之がこの歌をあげ、「痛切な神戸の現場でありながら長崎の自分でもあり、それはおそらく、東京大空襲や世界各地で今も起こつてゐる空爆で生きながらえた誰かの行為でもある。そんな普遍性に広がる契機を歌は持つてゐる」と書いてゐる。震災を経て読む竹山さんの

歌には、災害や戦争によつて理不尽に命を奪われた人間の姿、その本質が冷徹ともいえる目でとらえられていることを改めて思つ。

・生き得たるのみにてよしと誰もいふ興奮しみていまは言ふかも
竹山広『千日千夜』

・水のへに至り得し手をうち重ねいづれが先に死にし母と子
竹山広『どこしへの川』

・崩れたる石垣の下五指ひらきぬし少年よ　しやうがないことか
竹山広『眠つてよいか』

・うち伏しし家より空を蹴上げぬし二本の足よ　しやうがないことか
竹山広『千日千夜』

三枝が引いた歌も収められている『千日千夜』冒頭の阪神淡路大震災を詠んだ一連には、東日本大震災後のものであるかと思われるような作品が何首もある。六十九年前の長崎で手のひらを重ねて死んだ母子の姿は、東日本大震災の被災地にも現在のシリアやイラク等の紛争地にも通じる切ない犠牲者の姿である。竹山が「しゃうがないことか」と繰り返し詠んだのは、長崎の原爆を「しゃうがない」と言つた防衛大臣への問いかけであるが、この問い合わせる者である私たち一人一人にも向けられている。私たち人間は、今までもそしてこれから先も、このような理不尽な犠牲者を心のどこかでしようがないことと見過ごしてゐるのではないか。

・原爆を知れるは広島と長崎にて日本といふ国にはあらず
竹山広『地の世』

あれほどの被害を受けながら、日本といふ国は原爆を知らない。そして、おそらく原発についても。竹山さんの歌はそのように断じてゐるように思えてならない。